



# Daniel HARDING

Conductor

ダニエル・  
ハーディング  
指揮

©Julian Hargreaves

スウェーデン放送響音楽・芸術監督として、2017年に10周年を迎えた。20年以上におよぶ関係のマーラー・チェンバー・オーケストラからは終身桂冠指揮者の称号を与えられている。

ハーディングは定期的にウィーン・フィル、ベルリン・フィル、バイエルン放送響、ロイヤル・コンサートヘボウ管、スカラ・フィル、ドレスデン・シュターツカペレ、ロンドン響などから招かれている。オペラでの活躍も目覚ましく、ミラノ・スカラ座、アン・デア・ウィーン劇場、ウィーン国立歌劇場、ロイヤル・オペラ・ハウス（コヴェント・ガーデン）をはじめ、エクサンプロヴァンスやザルツブルクなど音楽祭でも数々の公演で絶賛を博している。2018年、イタリア・ピサのアニマ・ムンディ・フェスティヴァルの芸術監督に任命された。今回が都響との初共演となる。彼は飛行機の事業用操縦士（CPL）資格を有している。

Born in Oxford, Daniel Harding began his career assisting Simon Rattle at City of Birmingham Symphony, with which he made his professional debut in 1994. He went on to assist Claudio Abbado at Berliner Philharmoniker and made his debut with the orchestra at 1996 Berlin Festival. Daniel is Music and Artistic Director of Swedish Radio Symphony. He was Music Director of Orchestre de Paris (2016-19) and Principal Guest Conductor of London Symphony (2007-17). He is honoured with the lifetime title of Conductor Laureate of Mahler Chamber Orchestra. Daniel was named Artistic Director of Anima Mundi Festival in 2018 and Conductor in Residence of Orchestre de la Suisse Romande for 2021-22 and 2022-23 seasons. Daniel is a qualified airline pilot.

# C 第932回定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.932 C Series

Series

東京芸術劇場コンサートホール

2021年7月18日(日) 14:00開演

Sun. 18 July 2021 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

# T 都響スペシャル

TMSO Special

TMSO

サントリーホール

2021年7月19日(月) 19:00開演

Mon. 19 July 2021 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● ダニエル・ハーディング Daniel HARDING, Conductor

コンサートマスター ● 矢部達哉 Tatsuya YABE, Concertmaster

## シューベルト：交響曲第3番 二長調 D200 (24分)

Schubert: Symphony No.3 in D major, D200

I Adagio maestoso - Allegro con brio

II Allegretto

III Menuetto: Vivace

IV Presto vivace

休憩 / Intermission (20分)

## R.シュトラウス：アルプス交響曲 op.64 (50分)

R. Strauss: Eine Alpensinfonie, op.64

夜～日の出～登山～森に入る～小川に沿って歩む～滝～幻影～花咲く草原～山の牧場～  
道に迷う～氷河～危険な瞬間～山頂にて～景観～霧がわく～太陽がかけり始める～エレ  
ジー～嵐の前の静けさ～雷雨と嵐、下山～日没～終結～夜



### 〈アンケートのお願い〉

本日はご来場くださり、誠にありがとうございます。今後の参考にさせていただきますので、お客様のご意見・ご感想をお寄せください。お手持ちの携帯電話やスマートフォンなどから2次元コードを読み取りいただくか、下記 URL からでもご回答いただけます。



主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成： 文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術創造活動活性化事業) (7/18)  
 独立行政法人日本芸術文化振興会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

<https://www.tmso.or.jp/j/questionnaire/>

ヤングシート対象公演 (7/18) (青少年と保護者をペアでご招待)



## シューベルト： 交響曲第3番 二長調 D200

ウィーンの寄宿制神学校（コンヴィクト）で音楽の才能を伸ばしていたフランツ・ペーター・シューベルト（1797～1828）に、1813年から14年にかけて、転機が訪れる。変声期を迎え、学校の合唱児童の役割を果たせなくなったこと、また兵役を逃れる目的もあって、父親フランツ・テオドール・シューベルト（1763～1830）が教鞭をとる学校で、教師として働き始めた。そのかわり、寄宿制神学校時代から教えを受けていたアントーニオ・サリエリ（1750～1825）のもとでさらなる個人指導を受け、数々の曲を作る……。

これは、当時ウィーンでよく見られた「音楽愛好家」の典型的な活動のスタイルだった。音楽を純粋に愛するがゆえに、それで生業を立てず、しかし音楽の腕前は人後に落ちないという存在。交響曲第3番も、もともとは音楽愛好家から成るオーケストラのために書かれたものである。なお、彼らが集った内輪での初演（公開初演は作曲者の死後はるか経ってからになる）の際にはシューベルトもヴィオラ奏者として参加したようだ。

この交響曲は、音楽愛好家の住まいに構えられたサロンで演奏されることを念頭に置いていたためだろう。いわば室内楽の延長ともいえる小ぶりの楽器編成となっており、内容そのものも室内乐的な親密さと緻密さに貫かれている。第1楽章を書き始めたものの、おそらくは五線譜が足りなくなってしまったためしばらく作業が中断してしまった、という事情も、いかにも愛好家の仕事の状況にふさわしい。

ただし、当時の音楽愛好家がいかに一流の腕前を具えていたか……さらにはその一員だったシューベルトが、やがては職業音楽家への道を進むほどにいかにも豊かな才能を具えていたか……については、この作品を聴けばよく分かる。

**第1楽章（アダージョ・マエストーソ～アレグロ・コン・ブリオ）**は序奏付きのソナタ形式だが、重々しい序奏に続いて現れる主部の軽やかさが特徴だ。しかもクラリネットが演奏する第1主題の旋律は、後の交響曲第7番《未完成》第2楽章第2主題の後半部分との類似がよく指摘されるように、単なる軽さや明るさにとどまらない、痛切な憧れを密かに宿している。

**第2楽章（アレグレット）**は、シューベルトが手本としたウィーン古典派の交響曲の影響を受けた緩徐楽章。

それに続く**第3楽章（メヌエット／ヴィヴァーチェ）**は、やはりウィーン古典派の伝統を継いで「メヌエット」と表記されているものの、内容的には、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が得意としたような、より速いテンポの

スケルツォに近く、トリオ（中間部）にはオーストリアの民族舞踊であるレントラーが顔を出すという独自性に溢れている。

そして第4楽章（プレスト・ヴィヴァーチェ）は、イタリアの民族舞踊であるタランテッラのリズムに基づくソナタ形式だが、第2主題は「旋律」というより「動機」と呼んだ方がよいようなごく短いフレーズが、弦楽器と管楽器に交互に現れる。これもまたシューベルトの進取の気性であり、またそれに応えるだけの力を当時の音楽愛好家が持っていた証に他ならない。

（小宮正安）

作曲年代：1815年5月24日～7月19日

初演：公開初演（第4楽章のみ）／1860年12月2日 ウィーン  
ヨハン・ヘルベック指揮 ウィーン楽友協会会員から成る管弦楽団  
公開初演（全曲）／1881年2月19日 ロンドン  
アウグスト・マンス指揮 クリスタル・パレス管弦楽団

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

## R. シュトラウス： アルプス交響曲 op.64

「1914年11月1日」、リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）が《アルプス交響曲》を本格的に作曲し始めた日付だが、二重の意味で意味深長だ。

まず1914年。こちらはヨーロッパ全土がやがて破滅へと向かうこととなる第一次世界大戦（1914～18）が勃発した年である。ただし当初は、当時のヨーロッパを覆っていた漠然とした閉塞感や不安感が戦争によって解消され、希望に満ちた新たな世界へのリセットが行われるのではないかという期待感を、多くの知識人・文化人が抱いていた。その中でシュトラウスは例外的に、そうした熱狂から距離を置いていた。芸術家は政治に関わるべきでないというのが彼の考え方であって、その意味では《アルプス交響曲》も戦争に狂奔する世界とは一線を画した内容である。

次に11月1日。これはカトリック教会で「万聖節」（ドイツ語でAllerheiligen）と呼ばれてきた日だ。教会に関係するあらゆる聖人と殉教者とを記念する祝日で、11月2日の「万霊節」（同Allerseelen）と並んで死者の魂がこの世に帰ってくる日ともされている（シュトラウス自身も1885年《万霊節》という歌曲を作っているほどだ）。教会では死者への祈りを捧げる礼拝が執り行われ、墓地には花や蠟燭が手向けられるのだが、まさにこの日に作曲が始められた《アルプス交響曲》

も、元々はとある人物を追悼するための曲として構想されていた。

その人物とは、カール・シュタウファー＝ベルン（1857～91）というスイス出身の画家。アルプスの険しい山々に登ることに情熱を傾け、さらに道ならぬ恋に生き、最後は精神の闇に陥って自ら命を絶つという生涯を送った。シュトラウスはこの人物に着想を得た交響詩《芸術家の悲劇》を構想し、1900年にスケッチを開始している。

なお1900年には、シュトラウスが尊敬していたフリードリヒ・ニーチェ（哲学者／1844～1900）も亡くなっている。そうした事情もあって、シュタウファー＝ベルンの運命を表現した交響詩のアイデアは、やがてニーチェ的な世界観を宿す全4楽章構成の交響曲《反キリスト あるいはアルプス交響曲》へと発展した（「反キリスト」の原義は「キリストの教えに背く者」だが、ここでは「キリスト教の世界観を離れた自然への畏敬の精神」を表している）。

ただしこの作品は、シュトラウスが『サロメ』『エレクトラ』『ばらの騎士』といった新作オペラの作曲に舵を切り替えたこともあって、登山の情景を描く第1楽章が半ば書かれたところで放置されてしまう。その後、シュトラウスは1910年に第1楽章の創作を再開するが、1913年にこの部分のみを交響曲として独立させることを決意。そして先ほどの1914年の本格的な作曲へと結びつくこととなる。

なお1915年2月8日に総譜が完成された時点で、《反キリスト あるいはアルプス交響曲》は、《アルプス交響曲》という短いタイトルとなった。理由としてはもちろん、登山を描いた楽章のみを独立させて一つの作品にした事情が最も大きいだろう。だが穿った見方をすれば、戦争に向かって狂奔する世の中を前に、ニーチェ信奉者が時に陥りやすい狂信的な世直し待望への期待を巧みに避けたとは考えられないだろうか。敬愛していたニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』に着想を得た同名の交響詩においてさえも、「熱狂」とは距離を置き続けたシュトラウスならではの姿勢に他ならない。

というわけで、《アルプス交響曲》は、ニーチェの世界観やシュタウファー＝ベルンの運命云々といった文脈から一旦切り離され、アルプス登頂の一日を描いた作品となった。闇の中から太陽が昇り、登山が開始され、美しい風景に目を奪われたり危険な瞬間に肝を冷やしたりしながら山頂を制覇。だがその満足感も束の間、全天俄かに掻き曇り、嵐が襲ってくるなか大急ぎで下山が行われ、無事山裾に着いたころには壮大な日没となり、やがてすべては闇の中へと消えてゆく……。どのような対象であれ音によって表現できると豪語していたシュトラウスのことだけはあって、逐一言葉で説明しなくても今がいったいどのような場面であるのか、音だけで充分に理解でき、楽しめる。

しかも、自らも指揮者としてのキャリアを積むことにより、オーケストレーション

の技法にも長けていたシュトラウスのこと。数あるシュトラウスのオーケストラ曲の中でも最大規模の編成を駆使して、自然の織りなす大パノラマを描ききる。そうした意味合いにおいて、当作品はやはり「交響詩」ではなく「交響曲」なのだろう。

例えば19世紀初頭のルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）の時代から、オーケストラによる壮麗な音響世界が繰り広げられる作品を指して（それが実際に「交響曲」としての内容を備えているかどうかはさておき）「交響曲」という呼び方が存在したほど。またアルプスのテーマ、登山者のテーマが全曲を貫いて変容し、大きなクライマックスを築く様は、交響曲でお馴染みのソナタ形式の応用とも考えられる。

さらに日の出から登山の部分（夜／日の出／登山／森に入る／小川に沿って歩む／滝／幻影／花咲く草原／山の牧場／道に迷う／氷河／危険な瞬間）を第1楽章、山頂の部分（山頂にて／景観／霧がわく／太陽がかげり始める／エレジー／嵐の前の静けさ）を第2楽章、嵐と下山の部分（雷雨と嵐、下山）を第3楽章、日没の部分（日没／終結／夜）を第4楽章と捉える見方も可能だといえよう〔（）内はスコアに記された説明〕。

それでも、やはり当作品をシュトラウスが「交響曲」と名付けた一番の理由は、そこに何らかの人生観を反映させようとしたからではないか。ベートーヴェンの交響曲が単なる音楽作品にとどまらず、人間の生き方を映し出す宇宙となったのと同様、シュトラウスもまたそこに、アルプスの一日になぞらえた人間の一生を描こうとした。ヨーロッパが壊滅的な破滅に向かおうとする状況の中であって、それはもしかすると交響曲が人間存在の理想や理念を描くことのできた、最後の光芒の瞬間だったのかもしれない。

（小宮正安）

作曲年代：1914～15年

初 演：1915年10月28日 ベルリン

作曲家指揮 シュターツカペレ・ドレスデン

楽器編成：フルート4（第3、4はピッコロ持替）、オーボエ3（第3はイングリッシュホルン持替）、ヘッケルフォーン、小クラリネット、クラリネット3（第3はバスクラリネット持替）、ファゴット4（第4はコントラファゴット持替）、ホルン8（第5～8はワーグナーチューバ持替）、トランペット4、トロンボーン4、チューバ2、ティンパニ2組、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、チャイム、タムタム、ウインドマシーン、雷音器、カウベル、ハーブ2、チェレスタ、オルガン、弦楽5部、バンダ（ホルン9、トランペット2、トロンボーン2）

## Schubert: Symphony No.3 in D major, D200

- I Adagio maestoso - Allegro con brio
- II Allegretto
- III Menuetto: Vivace
- IV Presto vivace

Franz Peter Schubert: Born in Vienna, January 31, 1797; died in Vienna, November 19, 1828

Schubert's astonishing fecundity revealed itself no more spectacularly than in the year 1815, when, at the age of eighteen, he produced nearly two hundred compositions, including his Third Symphony. It was probably written for an informal gathering of amateur orchestral musicians, an ensemble in which Schubert participated as a violist. The first complete authenticated performance did not occur until 1881 in London, many years after Schubert's death.

At Schubert's symphonic gatherings, the symphonies of Haydn, Mozart, Beethoven (Nos. 1 & 2) and others were played, and the influence of these classical masters is not difficult to discern in Schubert's own early efforts in the genre. Constant eighth-note motion in the fast movements, the use of a slow introduction, a third movement entitled "Minuet," a folk-like trio section (of the third movement) and a scintillating finale are all carryovers from the eighteenth-century symphony.

Symphony No. 3 opens with a slow introduction whose principal feature is an upward scale. The *Allegro con brio* section is announced by a charming, unassuming theme played by solo clarinet with brief retorts from oboes and horns, a theme imbued with Schubert's unique brand of lyricism, one that could not be attributed to Haydn or Mozart. The second subject again goes to a solo wind instrument, this time the oboe. A spirit of Viennese gaiety and carefree delight pervades the music.

The next movement is an ingratiating *Allegretto* in simple ABA form. The clarinet again comes to the fore in the central section.

The third movement is marked *Menuetto: Vivace*, which is almost a contradiction in terms. The character is more that of a scherzo or heavy-footed peasant dance, with its characteristic accents on the upbeats. The Trio, another gem of Schubertian grace, features the oboe and bassoon; the *Menuetto* is then repeated.

The finale suggests the tarantella rhythm (long-short-long-short) as it skips along breathlessly. Its driving force and obsession with a single rhythmic pattern look forward to the finales in later masterpieces, the D-minor String Quartet and the *Great C-major* Symphony.

# R. Strauss: Eine Alpensinfonie, op.64

(An Alpine Symphony, op.64)

Night - Sunrise - The ascent - Entry into the forest - Wandering by the side of the brook - At the waterfall - Apparition - On flowering meadows - On the Alpine pasture - Lost in the thickets and undergrowth - On the glacier - Dangerous moments - On the summit - Vision - Mists rise - The sun gradually becomes obscured - Elegy - Calm before the storm - Thunder and tempest; descent - Sunset - Waning tones - Night

Richard Strauss: Born in Munich, June 11, 1864; died in Garmisch-Partenkirchen, September 8, 1949

Richard Strauss's colossal *Alpine Symphony* is one of the most remarkable works ever created to depict nature in sound. In this richly descriptive piece of program music, the composer depicts every aspect of the ascent and descent of an Alpine peak over the span of twenty-four hours.

To achieve his goal instruments are combined in unprecedented variety and pushed to the extremes of their range. Utmost virtuosity and stamina are required from every player. So vast and varied are the forces that it is worth noting them in detail: 4 flutes, 2 piccolos, 3 oboes, English horn, heckelphone (baritone oboe), E-flat clarinet, 2 B-flat clarinets, C clarinet, bass clarinet, 3 bassoons, contrabassoon, 8 horns, 4 Wagner tubas, 4 trumpets, 4 trombones, 2 bass tubas, 2 harps, organ, wind machine, thunder machine, glockenspiel, cymbals, bass drum, snare drum, triangle, cowbells, tamtam, chime, celesta, timpani (2 players), and an enlarged string section (Some of the above parts are covered by the same musicians, for instance, the Wagner tubas are played by horns 5-8). Strauss additionally requires a backstage contingent of brass used only in the "Ascent" episode near the beginning.

Strauss loved the Bavarian Alps, where he eventually built a villa in Garmisch-Partenkirchen, but he was never much of a mountaineer. Nevertheless, at the age of fourteen, he once spent a day with some friends climbing a mountain, and later wrote to Ludwig Thuille (a friend who missed the expedition) in terms that closely parallel the events described in the composition he was to write more than thirty years later: departure in the wee hours of the morning, the long climb to the summit, getting lost, a violent thunderstorm that thoroughly drenched everyone, drying off in a farmhouse, and returning home after dark. Strauss completed the score on February 8, 1915, and conducted the premiere himself in Berlin on October 28 of that year. Although nominally a symphony, this work is a symphonic poem (like *Don Juan*, *Till Eulenspiegel's Merry Pranks* or *Ein Heldenleben*) in all but name. One perceives it not as a series of movements in the standard symphonic format (slow introduction and *allegro* first movement - slow second movement - scherzo third movement - finale and coda), though attempts have been made to force it into this Procrustean bed, but rather as an extended fantasia built on the Lisztian principle of thematic transfor-



mation within the context of a story line or pictorial description. Actually, the *Alpine Symphony* is something of an anomaly in Strauss's career. It appeared more than a decade after he had written his most recent symphonic poem, *Symphonia domestica*, and by 1914, he was securely anchored in a career in the opera house, with six operas to his credit, three of them huge successes (*Salome*, *Elektra*, and *Der Rosenkavalier*). For his valedictory effort in the world of symphonic poems, Strauss created his biggest, most extravagant and most sensational of all, the *Alpine Symphony*.

Much has been made of the frankly, even graphically descriptive nature of this music, and it has its detractors for this reason above all. But Strauss himself saw things differently: "There is no such thing as abstract music; there is good music and bad music. If it is good, it means something; and then it is program music." The listener is of course free to listen to the *Alpine Symphony* as he or she choose: as a succession of landscapes and weather conditions in sound, as the composer's artistic affirmation of Nature, as a metaphor of Life as a mountain which Man must climb, or simply as abstract music.

Listeners will have little difficulty identifying the various scenes and events as they pass by. Nevertheless, a few pertinent remarks can be made: The deep silence of the "Night" is heard in thick, dark, B-flat minor chords; at times every note of the scale is being sustained. Against this opaque sound, low brass instruments present the first of many statements of a solemn chordal theme suggesting the massive, imposing mountain in all its stern majesty. "Sunrise" uses as its melodic material a bright, A-major derivation of the descending minor scale from the "Night" section. When the climbers begin their ascent, another principal theme, strongly rhythmic, is heard at the *allegro* entrance of lower strings, climbs to successively higher levels, and is worked out in elaborate counterpoint. A hunting party is heard in the distance, represented by an off-stage brass ensemble. (Strauss surely got this idea from similar scenes in Wagner's *Tannhäuser* and *Tristan und Isolde*.)

As the climbers continue their journey, orchestral colors, textures, and melodies depict thickening foliage, bird calls, yodels, waterfalls, the apparition of a water sprite, expansive flowery meadows, herds of cattle (the idea to use cowbells here is possibly derived from Mahler's Sixth Symphony), idyllic calm and beauty of the slopes, the slippery surface of a glacier (chromatic, "sliding" trumpet writing), the climbers transfixed by the awesome view from the summit, haze obscuring the sun, ominous stillness and calm before the storm, distant flashes of lightning, isolated raindrops (oboe), thunder, the fury of a blinding storm enhanced by a terrific explosion from the thunder sheet at the climax, the nostalgic glow of sunset, spiritual tranquility at the end of a fulfilling day, and finally, the gloom of night once more as the noble mass of the mountain recedes into darkness and memory twenty-four hours after we first encountered it.

**Robert Markow's** musical career began as a horn player in the Montreal Symphony Orchestra. He now writes program notes for orchestras and concert organizations in the USA, Canada, and several countries in Asia. As a journalist he covers the music scenes across North America, Europe, and Asian countries, especially Japan. At Montreal's McGill University he lectured on music for over 25 years.